



食のブランド化に関する弘大の研究成果を発表した報告会

## 目指せ食のブランド化

### 弘大が研究成果報告会

弘前

弘前大学は4日、本県の食のブランド化に向けた研究の成果報告会を同大で開いた。リンゴ、ニンニクといった農林水産品のほか、再生可能エネルギー、気候変動などに関する地域密着型の研究約60件について、同大教授らが解説した。

農学生命科学部の加藤幸一

准教授は、弘前市一町田地区で栽培されているセリの生育状況を調査した。2019年産は前年産に比べ草丈が短く茎が細いとのデータを示しながら、冬場のセリ田の水温や気温の高さが生育に影響したと説明。水温を考慮した適切な水深を数値化することで「これまで生産者が経験的に得ていた情報を、次世代に明確

に伝えることができるのではないかと展望を語った。また、弘前大学院理工学研究科の佐川貢一教授はリンゴ栽培の作業をサポートするアシスト装置の開発について発表した。作業者の体にセンサーを取り付けて

分析した結果、実すべりや葉取りのサポートは主に上半身になると指摘。一方で、収穫はかごにリンゴを入れたりかごを持ち上げたりする動作が加わるため、全身のサポートが必要だとした。

弘大の吉澤篤理事（企画担当）は成果報告会で「どれも地元の方々とつくり上げる大事なプロジェクト。研究を通じ、弘大の特色が鮮明になってきたのではないかと語った。

（古川靖隆）

※この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。

東奥日報社に無断で転載することを禁止します。

[問合せ先]弘前大学理工学研究科

E-mail:r\_koho@hirosaki-u.ac.jp